

大原社会問題研究所創立前史の記録

高橋 彦博

- 1 大原社研の起点；石井記念愛染園
- 2 セツツルメントとしての愛染園
- 3 大原社研の原点；岡山孤児院
- 4 大原孫三郎の社会派マインド
- 5 内務省の大原社研設立認可
- 6 さらなる検討課題

1 大原社研の起点；石井記念愛染園

大阪の天王寺区に大原社会問題研究所（以下、大原社研と略）が創立されたのは1919（大正8）年であった。1999年は大原社研創立80周年となる。この機会に、これまで詳しく検討される例の少なかった大原社研創立前史に関して、基本的な文献に示されている記述の概観と二、三の問題点の検討を試みることにしたい。

『大原社会問題研究所三十年史』（研究所刊、1954。以下『三十年史』と略）と『大原社会問題研究所五十年史』（研究所刊、1970。以下『五十年史』と略）の該当部分が、両者、ほぼ同じ記述内容であるが、これまでのところ、大原社研創立前史に関する基本的な文献における基本的な記述となっている。その記述内容については、二、三の修正点および補筆点を除けば、大筋において簡潔ではあるが的確であるとの評価を変える必要はないであろう。

『三十年史』と『五十年史』の中間地点で、『高野岩三郎伝』（岩波書店、1968）が、『三十年史』と『五十年史』の実質的な執筆者であった大島清教授によって発表されている。研究所所長についての評伝であるので、研究所創立前史に関しても、研究所の正史に比べかなり分析的な記述がなされていて参考になる。部分的に参照されるべき文献となっていると言えよう。

ところで、『五十年史』刊行後、『大原総一郎随想全集』（全4巻、福武書店、1981）と『大原孫三郎伝』（同刊行会編、1983）が刊行された。今日では、大原社研創立前史を大原孫三郎と総一郎父子の側から捉え直す作業が可能となっている。以下は、主として、この両書、『大原総一郎随想全集』（以下、『随想全集』）と『大原孫三郎伝』（以下、『孫三郎伝』）の既刊二文献による大原社研創立前史に関する書き込み作業である。その際、そこで浮上する何点かの検討課題については、一

歩，足を踏み入れることにしたい。

『三十年史』と『五十年史』の刊行後，大原社研創立前史について立ち入って論じた例としては，中村哲「幕末の倉敷知識人たち 大原社会問題研究所の『夜明け』」（大原社研『資料室報』No.173．1971年6月）と，中村哲，同上論文の改題版「大原社研の夜明け前 - 幕末の倉敷知識人たち -」（『法政』第20巻第11号，1971年11月）があり，二村一夫「大原社会問題研究所を創った人びと」（『大原社会問題研究所雑誌』No.426．1994年5月）がある。これらの先行業績を踏まえた上で，あえて，一，二の論点の追加を試みようとするのが，この研究ノートの趣旨である。

故・大島清教授の筆になる大原社研の『五十年史』においては，大阪に大原社研が創立された経過のポイントとして，まず，岡山の石井十次が残した岡山孤児院に代表される基督教社会事業の事跡が挙げられ，次いで，倉敷の大原孫三郎による石井十次の事業の継承が挙げられている。『五十年史』において大原社研の「創立前史」として示されているのは「大原孫三郎と愛染園」と題する数ページであるが（同書，pp.2-4），そこでは，以下に見るように，石井十次が大阪に拡張した社会事業の継承を目的に大原孫三郎が大阪の天王寺地区に設立した石井十次記念愛染園に注目が払われ，愛染園の救済事業研究室が大原社研創立の起点として位置付けられている（括弧内も『五十年史』のもの）。

一九一四（大正三）年石井十次氏が業半ばにして永眠するや，大原氏はその志をつぎ，自ら基金を投じて岡山孤児院大阪事務所を拡張し，天王寺の貧民窟の近くに財団法人石井記念愛染園を設立し，隣保事業を開始した（一九一七年一月二九日）。……大原氏は園内に救済事業研究室を設けた。これは，それまでわが国で行われて来たような，慈善事業，救済事業によって社会の病弊たる貧民や孤児を救済したのではもはや不十分である，さらに深く救済事業のあり方と，救済を必要とする社会の状態を研究することも重要である，との認識にもとづくものであった。

一九一八年（大正七）年一月三〇日，大阪市天王寺に愛染園の新築工事が落成した。その開所式の席上，大原氏は大要つぎのような発言をして人びとの注目をひいた。

この度愛染園に附設した救済事業研究室は極めて小規模ではあるが救済事業と社会状態の調査研究に当たり，さらに社会事業を推進する活動家の育成にも努めたいので，近い将来，独立の研究機関に発展せしめたいと思う。

『五十年史』の記述で，修正を要する一点がある。石井記念愛染園が内務・文部両大臣の法人認可を得て設立されたのは1917（大正6）年3月23日であったが，その前年の1916（大正5）年11月29日に創立総会が開かれている。そのことは，今日，社会福祉法人・石井記念愛染園に保存されている『理事会決議録』によって確認されるものとなっている。従って，法人認可年の「1917（大正6）年」と創立総会日の「11月29日」を結んで，愛染園の設立年月日を「1917（大正6）年11月29日」とする記述は，設立と創立を混同した誤記となる。この点について，『三十年史』では正確な記述がなされていたが，まず，『高野岩三郎伝』の本文で混同がなされた。同じ混同が，『五十年史』に受け継がれ，本文だけでなく巻末の年表を含めた誤記となっている。

『五十年史』の記述で，あえて指摘したい点がもう一点ある。『五十年史』における愛染園の新築工事落成が天王寺でなされたとする記述は必ずしも的確で十分な記録になっているとは言えな

い。愛染園から分立する大原社研の新築用地も天王寺に設定されたのであったが、天王寺といっても、それは愛染園と同一地点ではなかった。愛染園の施設が設置されたのは、天王寺区北日東町でありいわゆる下町であったが、愛染園から分立する大原社研が設置された伶人町は同じ天王寺区であっても高台であった。愛染園から大原社研が分立するに当たって、設立地点が下町の日東町から高台の伶人町に移動した経過は見落とせない一つの検討課題になっている。むしろ、この一点は、大原社研創立前史において、これまで留意されることのなかった重要論点の一つであると言える。

ここで、お断りしておきたいことがある。すでに上記の引用に見られるように、かつての社会事業の事跡に関する記述には、しばしば、「貧民窟」であるとか「スラム」であるとか、偏見や蔑視など、差別感情の露呈を放置する表現が当時の言葉のまま使用されている。記録の確認に当たっては、それらの言葉を文献にあるがままに引用せざるを得ない。しかし、その場合は、本来、これらの表現の妥当性が検討されるべきものであるとする前提における引用である。石井十次の岡山「孤児院」などという名称も、すでに当時において避ける方が望ましい表現になっていたのではなかったであろうか。以下で紹介を予定している『中国民報』紙のある記事の場合、ようやく通例化した用語法としてであるが、「貧民」について「細民」と言い直す姿勢が示されている。現在、岡山市の門田本町にある石井十次ゆかりの孤児保護施設は、育児院の名称を採用している。

ともあれ、大原孫三郎によって1916（大正5）年に創立された石井記念愛染園の救済事業研究室が大原社研の起点となり、愛染園の新築がなされた1918（大正7）年に孫三郎が公表した「独立の研究機関」構想が、その年、勃発した米騒動によって「強め」られることになり、1919（大正8）年、大原社研として具体化されるに至ったとするのが『五十年史』における大原社研創立前史の把握であった。この大筋把握的的確性は、関連文献によって確認されるものとなっている。

2 セツルメントとしての愛染園

大原社研創立の起点を愛染園に置くとして、そこで浮上する検討課題は、まずは、愛染園が「石井記念」とうたわれて大阪の南地区に設立された経過であり、その内容である。

石井十次の社会事業を継承し記念する施設として、直接的には、岡山孤児院の事業の大阪への拡張であった愛染橋保育所・夜学校の継承と展開して、1916（大正5）年11月に設立された石井記念愛染園であった。そもそも、岡山孤児院の大阪拡張の動機は何であったのか。それについては、石井十次本人が説明している例がある。

宮崎県児湯郡茶臼原にある石井記念協会が1934（昭和9）年に発行した『石井十次伝』（発行所・同上石井記念協会、取次所・斯文書院）によれば、岡山孤児院の事業の大阪への拡張について、石井十次は、「…鈴木氏（定直。大阪府警部長。石井十次の同郷人）より大阪市監獄及び、橋の下に起臥する浮浪少年の数二千以上あり、之を救済する道なきやと相談せられることあり。此時より大阪の救児事業は予の宿題となり居れり」と説明しているのであった（pp.130-131）。岡山孤児院の事業の大阪への拡張は、それまでの「孤児救済」事業の「救児」事業一般への拡張を意味していたのである。

記念協会発行の『石井十次伝』は、半世紀後の1987（昭和62）年に、大空社によって復刻された。

復刻に当たって大阪市立大学名誉教授の柴田善守氏が「解説」を寄せている。

この大量に発生してくる貧困者たちに救済の手をのべようとする人たちがあった。それは長い伝統をもつ仏教の信者たちではなくて、幕末にようやく伝来してまだ日の浅いプロテスタントの信者たちであった。そのひとりが石井十次である。…

しかし、集団養護の限界をまもなく知るのである。岡山孤児院に収容される孤児たちの多くが大阪の江戸時代以来のスラムの子であり、そして院出身者が再びこのスラム居住者となり、その子がまた岡山孤児院に入所するという事実を知るようになる。

柴田氏の「解説」においては、岡山孤児院の事業の大阪展開の背後にあったのは石井十次による「集団養護の限界」の自覚であったとされている。

ところで、石井十次の大阪における新たな事業展開は、必ずしも順調ではなかった。先にも見た、現在の社会福祉法人石井記念愛染園に保管されている基本文書の中の『日記』を参照しつつ、鷹津繁義（編）『石井記念愛染園三十五年小史』（同園発行、1953.）、および前掲『石井十次伝』（pp.130-135.）、その他における輻湊した記述から大阪の事業経過を拾って一覧表にすると、以下のような推移の激しいものとなっている。なお、大阪の事業経過について、石井十次『日誌』と愛染園『日誌』などに依頼した詳しい分析の成果として、長岡正巳「石井十次と大阪事業」（同志社大学人文科学研究所編・室田保夫／田中真人編著『石井十次の研究』角川書店、1999年、所収）があるが、ここでは経過の概観に留めることにした。

1902（明治35）年	大阪出張所を設置。1906（明治39）年、同出張所を閉鎖。
1907（明治40）年	北区首根崎新地の出入橋東詰めに岡山孤児院大阪分院を開設。3年間で101名を「見習奉公に就かせ…」た。岡山から活版部を移転、「孤児の職業をなす所」を企図したが、二年ほどで同部廃止。
1909（明治42）年	岡山孤児院大阪事務所で「貧児保育」「布教」「貧児の夜学校」を企図。名称は東洋救世軍、東洋救民会、友愛社、と変遷する。 この年、南地区への進出がなされる。南区下寺町四丁目の愛染橋西詰めで岡山孤児院附属愛染橋保育所ならびに夜学校の経営を開始。柿原政一郎が赴任。南区日本橋五丁目に、無料職業紹介、代書、代読、施療周旋を事業内容とする同情館を設置する。北区の大火で大阪事務所が類焼。同情館内に仮事務所を置く。友愛社の名を廃す。
1910（明治43）年	北区出入橋東詰めの大阪事務所を再開。事務所経由の「奉公子女」の数は30名ほど。南区日本橋の同情館を閉館。愛染橋保育所・夜学校の事業が中心となる。

岡山孤児院の事業の大阪進出は、特に南地区への進出において注目される経過となっていた。事業内容は、「孤児」救済から、多くは無戸籍の児童を対象とする「救児事業」へと変わっただけでなく、生活困窮者救済事業へと展開されるものとなっていた。1909（明治42）年の開設時において撮影されたと思われる「日本橋同情館」の写真を見ると、「舌代」とされた掲示板に「みもと…しごと…びょう（人）…てがみがき…」などとあるのを読める。この日本橋・同情館の事業内容と愛染橋の保育所・夜学校の事業内容には、同じ大阪南の地区での活動ではあったが、方向性において

分化があったと見ることが出来る。「同情」施設と「保育」「夜学」施設との分化である。

石井十次が50歳で永眠したのは1914（大正3）年であった。その間、愛染橋詰めにあった愛染橋保育所と夜学校が大阪の事業を継続していた。岡山孤児院大阪分院という法人名称の存続を1915（大正4）年時点で確認出来る。大原孫三郎が1917（大正6）年に石井十次の事業の継承と記念のために財団法人石井記念愛染園を設立する際、継承すべき「故人ノ偉業」とされたのは、『石井十次伝』が記す「愛染園の沿革」によれば、「愛染橋保育所並二同夜学校」であった。「孤児」救済事業は、生活困窮者の自活と自立のための援助事業となっていた。

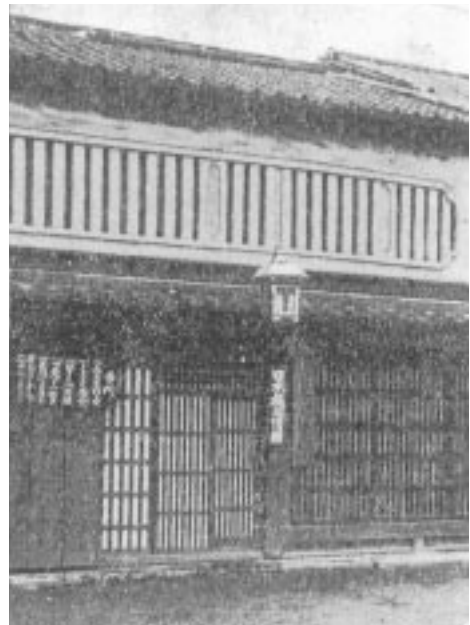
『石井十次伝』の復刻版における柴田氏の前掲「解説」において注目されるのは、岡山孤児院における「無制限収容」方式からもたらされた「集団養護の限界」の自覚が石井十次による大阪の南地区における「セツルメント」としての事業展開をもたらしたとしている点である。柴田氏は、石井十次は「四十二年（1909年）には大阪のスラム外にセツルメント事業を開始する」ようになったと指摘する。柴田氏は、また、石井十次は「岡山孤児院を開設以来、孤児教育に工夫し、院のあり方を研究し、ついにセツルメントを行うようになる」とも指摘している。対象者を施設へ収容する「孤児院」方式の救済事業は、救済対象者の居住地区に援助者が定住し援助施設が定在する地元定着方式の救済事業へと展開されたのであった。そこに、南地区への進出の意味があったのである。

柴田氏によれば、石井十次の社会事業を継承した大原孫三郎によって設立された石井記念愛染園もまた大阪南地区におけるセツルメント事業であった。

そして、この孫三郎によるセツルメントに社会問題研究部門を独立させる伏線となる研究活動が含まれていたものであり、その経過を柴田氏の「解説」は次のように記述している。

大原（孫三郎）は石井没後二代目の岡山孤児院長を兼任するが、「石井の形骸は継承しない、精神を継ぐ」といい、明治期の行きあたりばったりの社会事業ではなく、「研究をする必要がある」といい、石井の大阪事業を分離し、これを自己の事業として石井記念愛染園を創設し、富田象吉を中心としたセツルメント事業を開始する。

このセツルメントのなかに「救済事業研究室」を設置し、小河滋次郎、高田慎吾を迎える



「日本橋同情館（四十二年撮影）」
（石井記念協会『石井十次伝』1934年、P.131.による。）



「現在の大阪愛染園」
（石井記念協会『石井十次伝』1934年、巻末による。）

のである。この研究室は大正八年（一九一九）に分離し、所長に高野岩三郎、所員に森戸辰男、大内兵衛などすぐれた若い研究者をもつ大原社会問題研究所に発展するのである。

柿原政一郎は、大原孫三郎の社会文化事業への関わりを担当するという意味における特設秘書であったが、その柿原も愛染園をセツルメントであったと回想している。今日では現地に見当たらない愛染橋であるが、かつての愛染橋付近の情景が浮かび上がってくる柿原の回想であるので、まず、その部分を紹介しておきたい（柿原著『石井十次』日向文庫、1953年、pp.216-218.）

石井先生が大阪に蒔いた種々の種子の中で、最もよく繁茂し、今日まで生きているのが、愛染園である。第一場所柄が相応しく、名前も何となく床かしい。天王寺境域の外廓高台に愛染明王廟がある。其の下の小さい堀に架つているのが愛染橋である。明治四十二年夏四十五歳の時、石井先生初めて此处を視て、すぐ氣にいつた理由の一つも、其の名であつたらしい。…愛染橋の下は、いつも暗黒な色をした濁泥で、メタン瓦斯の匂が鼻を衝く。

柿原の愛染園社会事業研究室についての回想には、検討を要する事実問題が含まれているが、ここでは、そのまま紹介しておくことにする（同上、p.217.）。大原社研を創立するにあたって、愛染園救済事業研究室に対する過渡的暫定措置の必要が生じ、それが大原救済事業研究所となった経過があつたのであり（『高野岩三郎伝』p.216,p.218.）、以下、その点についての柿原の回想である。

愛染園の本務は、託児事業、夜学校を中心とするセツルメント事業で、富田主事夫妻の健闘で、西日本社会事業の中心として発達した。…三周年記念日に法人の発令式を兼ね、大正七年落成式までには、救済事業研究所の看板をも掲出した。…そして研究機関との同棲が無理となり、落成式の挨拶で、大原園長は、此の研究室は、近き将来独立とすべきものだと発表した。それから間もなく、大原社会事業所と改称し、大正八年米騒動による社会思想の激変に際会して、大原社会問題研究所に伸展して行った。

大原社研との関係においては、常に大原孫三郎を代弁する立場にいた柿原であったが、その柿原は、「大原社会問題研究所は、愛染園の分身であり、愛染園は岡山孤児院の分身である。石井先生から見れば、孫に当たる」（同上）と回想しているのであった。

ところで、大原孫三郎は、石井十次による社会事業の方式を無批判に継承したのではなかった。『五十年史』が記述するように、孫三郎は、従来の社会事業方式では「もはや不十分である」とし、その一段の飛躍を企図して石井記念愛染園を創設した。前出の愛染園保管文書中の「愛染園創立總會」の記録によれば、愛染園は、その発足に当たって、「研究室ヲ設ケ科学的研究ヲナシ其結果ヲ発表ス」との決議を行なっている。同じく愛染園保管文書『理事会決議録』綴り中の「財団法人石井記念愛染園事業概目」によれば、愛染園の事業として挙げられているのは「労働者ノ幼児ノ昼間保育」「無産階級者ノ幼児ノ幼稚園保育」「無産児童ノ小学校教育」などであった。さらに「研究部」の設置が挙げられた。そこでは、「研究及調査」活動が明示され、付属する「専門図書室」について「一般篤志研究家ノ為メニモ開放」「備付ノ社会問題専門図書三千余冊」と説明されていた。

石井十次と大原孫三郎の間にあるのは、批判的継承の関係であった。すでにセツルメント愛染橋保育所・夜学校において「孤児」救済から「救児」事業へという事業姿勢の転換がなされていたのであるが、それでも、石井十次の「孤児」救済、「救児」事業、という把握と、孫三郎設立のセツルメント・石井記念愛染園における「無産児童」教育という目的との間には明らかな距離があ

った。石井十次の没後、岡山孤児院の院長となり評議員となっていた孫三郎は、愛染園を設立した十年後となり大原社研を創立した七年後となる1926（大正15）年に、岡山孤児院解散の措置をとっている。この措置が孫三郎と石井十次の距離関係を明示するものとなっていた。

3 大原社研の原点；岡山孤児院

大原孫三郎の事業を継承した大原総一郎は、大原社研創立の経過について、大原父子の立場からする彼らならではの把握を見せている。石井十次による岡山孤児院の事業への共鳴を原点とする社会事業の展開があり、その多様な結実の一つとして、大原社研における社会問題研究の開始があるのであった。そのような位置付けが、大原父子の立場からすれば自然な把握となるのであった。大原社研を出发点とする場合には何段階かの遡及作業が求められる原点への到達であるが、大原父子の場合には常に原点・起点からの展開として経過の把握がなされているのであった。

たとえば、大原父子にとっては、大原社研の創立経過は、間違い無く、時間差を超えて大原美術館の創立経過と重なって立ち現れる経過となっていたことと思われる。しかし、大原社研から出立して大原美術館の創立過程にある両者に共通する原点の確認へ到達するためには、かなり屈折した道程を辿ることになる。ここでは、大原社研と大原美術館の共通性という検討課題への立ち入りは避けざるを得ない。

総一郎は、孫三郎による石井十次の事業の継承が批判の契機を含むものであったことを的確に理解していた。ただし、その場合、単純に、石井十次と孫三郎の関係を批判と克服の過程として捉えて終わっているのではなかった。総一郎においては、孫三郎による石井十次の事業の批判的継承のさらなる継承を、石井十次の事業の今日的意義の再評価を試みる姿勢で行なっていた。たとえば、大原社研の創立地点は、その前史から隔絶された地点として確定されるのではなく、大原家の社会文化事業総体の原点と起点から湧出する流れにおける一地点として、その原点と起点を再評価し再確認する新たな展開地点として確定されていた。総一郎の視点からすれば、愛染園から分立して大原社研が創立される新たな地点とは、慈善事業形態から脱出する新境地であるだけでなく、大阪の南で展開されたセツルメントの志と社会的役割を社会問題研究の領域で受け継ぐ新たな展開地点として位置付けられていた。

『石井十次伝』の解説者・柴田善守氏による石井十次の研究が1964年に『石井十次の生涯と思想』として公刊されている。その「刊行者」となったのは、社会福祉法人石井記念愛染園であった。愛染園の理事長となっていた大原総一郎は、柴田氏のこの書に、「刊行のことば」を寄せている。小論文とも言える4ページほどの「刊行のことば」であったが、ここで、総一郎は、孫三郎による石井十次の事業の批判的継承のさらなる継承の今日的意味を次の三点において自覚していることを明らかにしている。

(1) 石井十次の岡山孤児院の事業に、大原孫三郎は「一物一体たるべき責任」を感じとっていた。そこには一種の召命観があった。石井記念愛染園は、孫三郎の召命観の具現にほかならなかった。総一郎における石井記念愛染園の継承は、孫三郎の召命観の継承に関する総一郎の使命感においてなされるものとなっていた。この使命感は総一郎に限定されるものとはなっていない。

私の父、孫三郎は石井十次先生から多大の感化を受けた。父は、「余と岡山孤児院とは一

物一体たるべき責任がある」と考えて、石井先生の事業を援助し、石井院長没後は暫く院長をもつとめた。後に企業経営者とならんで、社会問題に関心を寄せるようになった大きな機縁はここにあったと思う。父は岡山孤児院の解散を決意したのち、大阪市天王寺の岡山孤児院大阪分院の保育所と夜学校を故人を記念するため石井記念愛染園として、石井先生の遺志継承の財団法人とした。そして今私が、この石井記念愛染園の運営の責任を負って、その事業を通して石井先生の偉業を讃え、かつ記念しようと微力を捧げうことは、私にとって光栄これにすぎるものはない。

(2) 大原総一郎が石井記念愛染園を継承する使命感の内容となるのは、総一郎が石井十次の事業に与える今日的評価であった。岡山孤児院の事業は、「個人」の立場からなされた「社会的貧困」に対する果敢な「挑戦」であったと理解するのが総一郎の石井十次評価である。総一郎によれば、石井十次は、キリスト教福祉事業の開拓者であるだけでなく、国家構造の歪みにほかならない「社会的貧困」に立ち向かう場として「個人」を設定したところにその特異性があったのであり、その意味では、国家への「挑戦」者であった。国家機構に埋没しない「個人」の場の設定である。

日本が封建社会から近代国家へと急激な伸展をするうず巻の中で過ごされた石井先生の生涯は、そのまま明治史の一側面であったといってもよい。明治維新は日本の社会を一新し、日清・日露戦争は外に国威を発揚し、産業革命は内に人々の繁栄をもたらしたかにみえた。しかし明治の時代は栄光の道ばかりではなかった。この前進の背後には、いたましい社会的貧困がいたる所で露にされた。しかもこの貧困に差し述べられる国家の施策は何一つとしてなかった。石井先生の岡山孤児院はこのために個人が立ちあがった最初の挑戦であり、また一個人がなしうる限界をはるかに超えた大事業であった。

(3) 岡山孤児院の事業は、国家の福祉施策の欠如を埋める事業であり、総一郎は、そこに制度化された福祉国家に欠落する社会福祉の「強烈な魂」と「熾烈な精神」を見出し、石井十次の「民間社会事業」を再評価する見解を明らかにした。石井十次の事業の批判的継承者であった孫三郎のさらなる継承を意図する総一郎の立場は、石井十次の社会福祉事業における「強烈な魂」と「熾烈な精神」を、今日の状況で、福祉国家体制と異なる福祉社会の理念において受け止め直すものとなっていた。「個人」の場から発せられる福祉社会論へのこだわりである。

その後、歴史は進み社会は変化した。石井先生の孤児院をそのまま現代に再現することが、石井先生の遺志を継承する唯一の方法だとは考えない。今日では社会福祉の問題は、個人の篤志や犠牲から国家の仕事に移りつつある。「福祉国家」の名の如く福祉は制度化されようとしている。しかし、制度化されたものには、その精神が没却されがちである。…近來の制度化、形式化の時代にあつてこそ石井先生のような真摯にして強烈な魂の存在が私たちの心に強く訴えるのである。また社会福祉が制度としていかに進んでも先生のごとき熾烈な精神を有する民間社会事業がなお存在することの必要を感ずるし、そこにも先生が再評価されねばならない第二の理由がある。

以上のように、大原孫三郎による石井十次の社会事業の批判的継承の意義を理解した上で、総一郎が、そこに、さらなる継承を加えることの意味は、総一郎によって、石井十次による岡山孤児院の慈善事業を、あらためて、今日的に再評価することにあると自覚されているのであったが、この

総一郎の自覚は、孫三郎によって組み込まれたすべての社会事業に対し、その原点が、石井十次による岡山孤児院の慈善事業にあることの確認を求める姿勢となって現れる。

それは、大原社研に関しては、その起点が愛染園の救済事業研究室に求められて終わることなく、その原点が石井十次による岡山孤児院の慈善事業にあることの確認がなされるべきであるとする見解の表明となる。大原孫三郎によってなされた大原社研設営の地点選定の意味を総一郎が読み解いている例があるが、その場合、総一郎のそのようなメッセージの強烈的な伝達が行なわれていると理解出来る。以下は、総一郎の「石井十次先生の生涯と思想」(『大原総一郎随想全集・1』福武書店、1981所収)の一節である。

.....石井先生は明治四十二年、自ら大阪の有名な貧民街であった今の浪速区日本橋日東町を視察し、愛染橋詰に家屋を借りて、夜学校、保育所を開設しました。これは、従来の孤貧児の救済という消極的な方法から、むしろ孤貧児の発生地である大都市の貧民街の対策という抜本的方法へと一歩を進められたこととなります。

.....大阪を日本の中心、東洋の中心と考え、それ故に、一時、岡山孤児院の本拠を大阪に移そうとも考えていたようであります。

.....石井先生の愛染橋の保育所は...大阪市天王寺の通天閣をはさんで、釜ヶ崎と相對しています。この施設は、石井先生の死後、石井記念愛染園となって石井先生の意思をついで、現在も社会事業を続けております。この石井記念愛染園の中で大原社会問題研究所が生まれ、更に労働科学研究所が発足したのであります。

以上にある「通天閣をはさんで、釜ヶ崎と相對しています」とする一言は、石井十次と大原孫三郎がセツルメントを設営した地域の特徴を描くための総一郎による説明であるが、その際、明らかに「貧民街」とする地域把握が前提となっている。総一郎においても「貧民」観念への滞留があり、「釜ヶ崎と相對して...」とする地点設定が平然としてなされる感性の残留があったのである。そもそも、通天閣が最初に立ったのは、間もなく「大正」と改元されることになる1912年の7月であった。石井十次が大阪の南に進出し愛染橋西詰めで保育所と夜学校の事業を開始したのは1909(明治42)年である。この「天王寺の通天閣をはさんで...」の一語は、いろいろな意味で誤解を生む総一郎らしくない表現であった。

それにもせよ、セツルメント・石井記念愛染園の立地点について、大原総一郎が、生活困窮者が多い地域であったと活写することの意味は明らかではなからうか。大原社研発足の地となった天王寺区の伶人町は、高台ではあったが、大阪の南の日本橋地区に隣接する地点であった。大原社研の愛染園からの分立は、地点設定としては、下町との完全な分離を意味していなかったのである。そのことを、総一郎は強調したかったのであろう。

大原社研が創立された伶人町の土地は古寺・秋の坊の敷地であった。秋の坊は、聖徳太子創建以来、貧病者への施薬療養など救済事業の永い伝統をもつ由緒ある寺であったことが『高野岩三郎伝』や『五十年史』において確認されている。今は姿を消しているが、90年ほど前には、現在の下寺町あたりに愛染橋があった。その愛染橋の袂から、今も残る愛染坂を上ると、坂の上の左に愛染堂があった。愛染堂に向かい合う坂の上の高台地区が伶人町であった。伶人町の通りの向こうには四天王寺があり悲田院町が続いている。通天閣を見下ろす地点、ただし、通天閣を常に視野に入れる地

点である天王寺の高台が大原孫三郎によって選定され、大原社研がそこに設営されたということは、社会問題研究の起点と原点がどこにあるかを示す象徴的なロケーションになっていたと、総一郎は読み説いているのであった。



「大阪時代の大原社会問題研究所」
（『大原社会問題研究所五十年史』による。）

4 大原孫三郎の社会派マインド

『五十年史』が大原社研の「設立者」として認めているのは、大原孫三郎である。その孫三郎が倉敷の出身者であるというだけでなく、孫三郎の文化社会事業への取り組みが直接的には石井十次とか岡山孤児院とかの影響を抜きにしては考えられないものとなっている点から、大原社研の創立前史を、倉敷と岡山の知的雰囲気求めなければならないことが明らかである。

ところで、その知的雰囲気として岡山・倉敷の地における基督教の拡がりの歴史経過を見ると、まさに中村哲氏の捉える「幕末の倉敷知識人たち」の世界に入り込まざるを得ないことになる。「わが国最初の社会問題研究機構は、この土地の文化的環境の中から創設されたもの」にほかならないのであった（中村，前掲「大原社研の夜明け前」参照）。しかし、さしあたっては、孫三郎の社会問題研究についての課題意識の形成を、主として『孫三郎伝』における岡山と倉敷の知的雰囲気に関する記述を概観することによって、孫三郎における社会派マインドの形成として把握する作業に課題を限定しておきたい。

大原孫三郎の逝去40周年（1983年）の機会に刊行された『孫三郎伝』であったが、その編纂業務には曲折があり、執筆者も草案の執筆者、書き下ろし稿の執筆者と変遷し、その間に、世話人として柿原政一郎、編纂委員として大内兵衛、森戸辰男、暉峻義などが加わった経過があったとされている。なお、大原総一郎の死去は『孫三郎伝』刊行前の1968（昭和43）年であったが、総一郎は、生前、草案執筆稿の段階で「種々加筆訂正」を試みていたとのことである。従って、『孫三郎伝』の中に紹介されている、以下に見るような、青年・孫三郎の「心霊上の大改革」を記す日記断片の内容は、関係者によって確認された記録になっていると受け止めて良いであろう。

遊蕩生活にほかならなかった東京専門学校（早稲田大学）の学生生活を打ち切って倉敷の大原家に返って来た孫三郎は、1899（明治32）年、石井十次に接した機会から聖書を精読、「生の責任」を痛感、石井十次から「心霊の進歩」を評価されるに至る。この時期の孫三郎の日記から、彼が自らの心に刻み込んだ「生の責任」の内容を見ると、それは、孫三郎の言葉にもなっているのであるが、「天職」観念にほかならなかった。大原家を継ぐ立場における「天職」の自覚は、孫三郎に「余は、余の天職の為此の財産を与へられたのである」とする覚醒をもたらし、1902（明治35）年

5月23日付の日記に「全くこの大原の財産なるものは神のために作られているもので、神の為に遣ひ尽すか、或いはその財産を利用すべきものと信ずる」と記させている（『孫三郎伝』p.41.）。岡山における石井十次との「邂逅」を契機として聖書による「開眼」を遂げた孫三郎は、ここで「終生の大転換」を行なったのであり（『孫三郎伝』p.34.）、ここから孫三郎の「天職」観念の発露としての「終生」における社会事業への取り組みが開始されることになったのであった。

孫三郎の「天職」観念が社会事業への取り組みとして具体化される背景に、19世紀末から20世紀初頭へ懸けての岡山と倉敷における基督教と社会主義の文化的拡がりがあった。『孫三郎伝』の記述の中から、岡山と倉敷において育成された青年・孫三郎の社会派マインドの形成契機を拾うと、以下の諸点となる。

(1) 倉敷の基督教信者によって設けられた基督教講義所には、岡山基督教教会牧師であった安部磯雄がたびたび伝道に来ていた。この講義所や日曜学校へ来て英語を教わり基督教の話を書く少年たちの中に、当時、小学校三年生であった9歳の孫三郎がいた。1889年（明治22）のことである（『孫三郎伝』pp.17-18.）。

(2) 倉敷駅前通り栄町に新設された精思高等小学校の生徒8人が写っている「明治26（1893）年頃」と記された一葉の写真がある。そこで、孫三郎と並んで写っているのは山川均であった。11歳から12歳頃の少年期に、孫三郎は山川と高等小学校で遊び仲間であった。当時、孫三郎は山川と「よく議論をしていた」とされている（『孫三郎伝』p.18.）。ただし、その後の孫三郎における山川との交流が『孫三郎伝』に記されていることはない。

(3) 14歳の孫三郎は、閑谷覺に学ぶ。池田藩の藩校として熊沢藩山の陽明学の伝統を受け継ぐ閑谷覺であった。孫三郎は、この学校の雰囲気に馴染めず、同校を2年で去り、東京専門学校で学ぶことになる（『孫三郎伝』p.23.）

(4) 倉敷の新川小学校で1899（明治32）年に開かれた岡山孤児院のための慈善音楽会で石井十次を知った孫三郎は、石井十次なる人物の「風格や説得力に深い感銘」を覚えたとされている。この年、孫三郎は数回、岡山孤児院を訪問。翌年から、岡山孤児院の基金管理者の一人となる。孫三郎は石井十次の事業に対する「物心両面の援護者」となるだけでなく「密接な関係」の保持者となった（『孫三郎伝』pp.34-36.）。幕末の儒学者・林孚一の孫にあたる林源十郎との交遊も石井十次との関係が密接になる要因となっていた。

(5) 孫三郎の東京専門学校における学生生活は遊蕩三昧に明け暮れるものであったが、それでも、足尾鉾毒問題に関心を示し現地に足を踏み入れることをしていた。青年・孫三郎は、早くから『万朝報』や『平民新聞』の読者であった。「社会問題講究会」なる会に「ひそかに入会」し、「番頭の名前を借りて入会...その出版物を講読」することもしていた（『孫三郎伝』p.59.）。その会が、矢野龍溪の社会問題講究会であれば、1902（明治35）年のことであり、孫三郎が21歳か22歳のときのこととなる。

(6) 岡山で教会牧師としての歩みを開始した安部磯雄は、やがて、早稲田大学の教授となる。この間に、安部は、社会問題への関心と基督教慈善事業の限界点の自覚から社会主義へと向かう転生の過程を辿っていた。そのような安部と、孫三郎は、子供の時からの接触経過を生かした関係を継続すると共に、母校である早稲田大学との関係を深めることになる。1902（明治35）年以降、

孫三郎は、「倉敷日曜講演」の設営者となっていたが、そこに招かれた矢野文雄（龍溪）、田島錦治、徳富猪一郎、三宅雄二郎、山路愛山などの講師陣の中に高田早苗、安部磯雄の名を入れただけでなく、1911（明治44）年には、この講演会シリーズに大隈重信と浮田和民を出演させている。また、孫三郎は、浮田に寄付金と基金の提供を約し、早稲田大学内に、永井柳太郎と安部磯雄を主査とする労働問題調査会を発足させた。後日、大原社研の発足に当たって、孫三郎は、浮田に、早稲田大学の北沢新次郎を所員に採用する旨を約している。孫三郎は、早稲田大学の校友となり、やがて「校賓」となった（『孫三郎伝』pp.84-85.）。孫三郎周辺の人脈には早稲田色が濃厚であった。

(7) 石井十次の支持者となっていた大原孫三郎であったが、岡山孤児院方式の貧困救済事業の限界点に直面し、1916（大正5）年、安部磯雄と、「倉敷日曜講演」の講師として招いた小河滋次郎の二人に対応策を相談している。安部と小河の意見は「社会問題を科学的に研究する研究所を作るのが急務である」とする点で一致した。孫三郎は、石井記念愛染園に「社会問題研究室」を付設する案を抱くことになる（『孫三郎伝』p.125.）。社会問題研究は、安部が1899（明治32）年に早稲田大学講師に赴任するに当たって大隈重信に言明した研究テーマであり、その頃、『六合雑誌』主筆として論陣を張っていたテーマであった（『社会問題解決法』1901年）。また、小河は、大阪府救済事業囑託として、間もなく「方面委員」（民生委員）制度の創設に関わる人物であったが、早くから社会問題の研究者としての立場を明らかにしていた（『社会問題救恤十訓』1912）。小河は、東京外大、慶応義塾、東京帝大、で学んでいるが、1907（明治40）年、大隈重信銅像の落成に当たって「早稲田大学校友、学生総代」として式辞を述べた人物である。

(8) 安部磯雄とヘンリー・ジョージの思想について語り合い（前掲、柴田「解説」）、1911年来日したウエップの「救貧は防貧に如かず」とするナショナル・ミニマム論の演説に共感を覚え（『孫三郎伝』p.125.）、フェビアン・ソシアリズムに引き寄せられていた社会派青年が若き日の大原孫三郎の姿であった。「やがて大原社会問題研究所の機運につながる胎動は、既にこの時代から感ぜられる」のであった（『孫三郎伝』p.54.）。孫三郎のフェビアニズムは総一郎に継承される。

以上、『孫三郎伝』で、岡山と倉敷の場における大原孫三郎の社会派マインド形成契機を見たわけであるが、そこに、次のような一つの記録があって重視せざるを得ない。それは、倉敷の人となった青年・大原孫三郎が、その頃、ある一人の人物と取り交わした会話の記録である。その人物とは、先に、その小著『石井十次』における愛染橋ドブ川風景の回想を紹介した柿原政一郎である。

柿原政一郎は、石井十次が孫三郎に秘書として推挙した日向高鍋出身の人であり、石井十次の甥に当たる人物であった。『五十年史』では、しばしば、孫三郎の秘書として大原社研との連絡・交渉に当たる人物として登場する柿原であるが、孫三郎にとって、柿原なる人物は秘書以上の存在であった。柿原は「孫三郎の生涯を通じて社会奉仕の仕事を助ける」人であったとされている。東京帝大中退の柿原が倉敷紡績に入社したのは1907（明治40）年のことであったが、その時、柿原と孫三郎との間で、次のような会話が取り交わされていたという（『孫三郎伝』p.73.）。

柿原「私は元来社会主義者で、貧民窟の研究などに関心を持っています。従ってお金持ちの大原家の番頭には最も不向きで、到底秘書など勤まりません。」

大原「いや僕も実を言えば社会主義に関心を持っている。大原家の財産というものは祖先から貰ったものだが、僕はこの財産は神から世のため、社会のためにお預かりしているも

のだと思っている。…この気持ちが分かってもらえるなら、僕のこの神からお預かりしている財産を、最も有効に社会に奉仕するという方面の僕の仕事を援けてもらいたい。」
柿原「お話はよく分かりました。それでははっきり言いますと、社会のために大原家の財産を潰そうというのが、あなたの理想なのですか。」

大原「そのとおりです。」

柿原「それならば私も真剣に今後あなたのお役に立つように努力します。」

大原孫三郎が大原家の家督を相続したのは日露戦争が開始された年、1904（明治37）年であり、孫三郎が24歳の時であった。家督相続の直後、青年・孫三郎は青年・柿原と密かに社会派マインドを吐露する盟約を交わしていたのである。青年・孫三郎が「天職」観念に目覚め、社会文化事業の主宰に「召命」を見出す心底にあったのは、おそらくは大原家の地域社会との関わりで歴史的に生じていたある種の負い目ではなかったであろうか。たとえば、「下津井事件」との関与（中村「幕末の倉敷知識人たち」参照）が、青年・孫三郎の原罪観、贖罪観、となっていたように思われる。

孫三郎と柿原との間で交わされた「社会のために大原家の財産を潰そう」という奇妙な内容の密約は、その通りにではなかったが、かなり忠実に履行されることになった。1917（大正6）年、石井記念愛染園が発足した時、そこに住み込んで事業展開に当たったのは柿原であった。柿原は石井記念愛染園の評議員を務めている。1919（大正8）年、孫三郎の意を体して、大原社研創立について高野岩三郎に話を持って行く使者となったのは柿原であった。柿原はまた、法人となった大原社研の初代監事となり、東京移転の時までその任にあった。この間、1928（昭和3）年には大原社研から感謝状を送られている。第二次大戦後の1951（昭和26）年、大原社研の評議員となり、終生、その任にあった。

その外、柿原は、大原孫三郎の意を汲んで『中国民報』（後に『山陽新報』と合併）の記者となった上で同社の社長の任に就いている。大原社研の出版部として機能した同人社は、まずは『中国民報』の支局として発足していた。同人社を代表する大島秀雄は『中国民報』の社員であり柿原の部下であった（『孫三郎伝』p.103,p.145,p.228.）。柿原は、衆議院議員、宮崎市長、などを務めた政治家であった（荒川如矢郎『柿原政一郎』柿原政一郎翁顕彰会刊、1977.参照）。柿原は、孫三郎の政界におけるエージェントの役割を果たしていた。

5 内務省の大原社研設立認可

社会問題研究所創立の構想を、大原孫三郎が世に明らかにしたのは、下寺町における石井記念愛染園の建築工事が終わり、石井十次の永眠記念日に開園式が行われたその場のことであった。そこで、孫三郎は、「近い将来」における「独立の研究機関」構想を公表して人々の注目を引いたのであった。しかし、これは、大原社研創立に関する第一報ではなかった。

愛染園開園式の半年ほど前の時点で、柿原政一郎が関与する『中国民報』紙が、大阪に労働問題・社会問題の研究所を設立するという大原孫三郎による計画があり、孫三郎が大阪府と折衝に入ったことを報じている。1917（大正6）年6月14日付、大阪よりの特電、とあるのがそれである（『孫三郎伝』p.128.）。これが、大原社研創立の第一報であった。

岡山県倉敷町の素封家大原孫三郎氏は、現に大阪市に財団法人愛染園を設け、細民の救済

幼児保育等、各種の救済事業に尽くしつつあるが、更に戦後における労働問題其他社会問題の研究所を大阪に設立せんとし、事業の援助方に就き大阪府に照会あり、林知事も考慮中なるが、設立の上は学者、経世家を集め各般の社会問題の調査研究に資する具体的方法を講ずべしと。

ここで明らかにされたのは、大阪に社会問題研究所を創立するのであれば、純粋な民間の機関であるとしても、まず大阪府に「照会」し、その意向を確かめ、指導を仰ぎ、事実上の認可を得る必要があったということである。

そもそも石井記念愛染園設立の時がそうであった。大原孫三郎は大阪府知事を訪ね、石井記念愛染園設立について「当局の後援を懇請」している。大阪府は、内務省地方局出身で府の救済事業指導囑託となっていた小河滋次郎を愛染園の「指導者」に充てた（『孫三郎伝』p.124.）。大阪府の行政指導は直ちに実行されている。愛染園保存文書である「石井記念愛染園寄付行為」を見ると、小河は、愛染園「設立者」の一人として名を連ねている。そして、愛染園に救済事業研究室を設ける案の起案者となったのは、府の救済事業指導囑託の身分ながら、当時の府の社会事業全般の「指導者」の任に就いていた小河であったのである（石井十次の研究者である柴田善守氏に『小河滋次郎の社会事業思想』日本生命済生会刊、1964、があって参考になる）。

当時、府の行政は、中央の内務省による地方行政にほかならず、府の救済事業課設置も内務省の指示を受けた結果としての措置であった。従って、救済事業研究は中央から委託された府の職務となっていたのであるが、それが社会問題研究に転換されるとなると、改めて中央、すなわち内務省本省の認可を得なければならない案件であることになる。そこでは、大阪府の救済事業担当者としての小河滋次郎ではなく、元、内務省官僚で間もなく内務省の救済事業調査会委員となる小河滋次郎の存在が浮かび上がって来ることになる。小河が大阪府から派遣された「指導者」として石井記念愛染園に関わっていたことは、救済事業研究室の創設と、続けてなされた救済事業研究室の社会問題研究所への改組にとってプラス要因となったと見て良いであろう。

柿原政一郎によると思われる『中国民報』の特報がなされた時点で、社会問題研究所創立構想における大原孫三郎の労働問題への対応姿勢が、倉敷紡績社長としての立場において、次のように明示されていた。『中国民報』の特報から「一ヵ月足らず後」の時点とされているので、おそらくは1917年7月上旬と思われるが、孫三郎は、倉敷紡績工場長会議で講演し、持論である「向上の人道主義」を披瀝している（『孫三郎伝』pp.129-130.）。

諸君、私が屢々口にしている向上の人道主義即ち職工その人の人格を認めてその幸福を増進するといふことは、実に私の労働問題解決に対する主張の根本主義であつて、同時に倉敷の職工待遇上の根本趣旨である。……而してこの主義が徹底する時、即ち理想実現の時は、わが工場が労働者と資本家との協同作業場となつて現はれる時であると確信するものである。

第一次大戦直後の時点における大原孫三郎の所信表明であったが、そこに見られるのは「十年一貫して何等変る処はなく、今後とても同様である」とされている清教徒的資本主義観念であり、ロバート・オーエンを思わせる理想主義的社会主義観であった。その際、労働問題の発生とそれへの対応を国家のレベルにおいてではなく社会のレベルにおいてとらえているところに、その特徴があ

る点に注目しておきたい。というのは、この時点で胚胎されていた孫三郎の社会問題研究所構想は、その実現過程において内務省と財界主流による国家主導型労資協調主義と競合する関係に立たされることになるからである。

社会問題研究所構想が、大原孫三郎によって初めて公表された愛染園開園式挨拶であったが、『五十年史』で紹介されている挨拶の「大要」では、ある重要なポイントが省略されているので、他に残されている記録で当該箇所を正確に見ておくことにする（『孫三郎伝』p.131.）。

将来或る時期において、救済事業研究室を一層拡張し、愛染園の事業より之を独立せしめ、以て新業発達に資する所あらんとするの希望を有するも、今はまだ具体的に之を発表するを得ず。速やかにこれを実現し得るやう各位の御援助を切望する。

愛染園内に設けられた「救済問題研究室」は「二室ほどのささやかな施設」であったという。研究員となったのは「内務省救済課の囑託であった法学士高田慎吾」であった。そして、「孫三郎の企図したものは、単に救済事業の研究だけではなく、広く社会問題を研究する機関を造ることであったが、前途にはいろいろの難関が横たわっていた」のである（『孫三郎伝』p.131.）。孫三郎が愛染園開園式の挨拶で「今はまだ具体的に之を発表するを得ず」としていたのは前途に難関の所在があったからであった。孫三郎の社会問題研究所構想の前に横たわるその難関とは、研究所スタッフの構成の問題でもあったであろうが、主として内務省の「許可」を得る課題であったことと思われる。超然内閣であった寺内内閣の段階では、社会問題研究所の提起は「まだ具体的に之を発表するを得ず」とせざるを得なかったのである。

寺内内閣が米騒動で倒れ、1918（大正7）年9月、政党内閣として原敬の政友会内閣が出現した。孫三郎は「この政変を好機として、十月下旬社会問題研究所許可申請書を携えて上京し、当局にその許可を陳情した」のであった（『孫三郎伝』p.133.）。東京へ向かう車中の孫三郎の気迫に満ちた表情が十分に窺える短い記述である。孫三郎は、内務省から次のような許諾を得ることが出来た。

内務大臣である床次竹二郎が示した意向は「社会問題の研究というより、政府の労資協調運動に協力して欲しい」とするものであった。内務省としては、まさに協働会を組織する作業の最中であつたのである。地方局長の添田敬一郎（後の協働会常務理事）の見解は「社会問題研究所は名称が穏やかでないから、社会事業研究所か救済事業研究所のほうが良いのではないか」とするものであった（『孫三郎伝』では添田が赤田となっている）。救済課長の丸山鶴吉（後の警視總監）が「ソシアル・プロブレムだから社会問題研究所でかまわない」との判断を示し、孫三郎は、最終的には内務省の「許可の内諾を得る」ことができたのであった（『孫三郎伝』p.133.）。丸山鶴吉の判断は、社会問題研究所は社会主義研究とは違うとするものであり、そこには、社会問題への対応を課題として自覚しつつあった内務官僚としての鋭敏さが示されていた。

この内務省の内諾を獲得する過程で効果的に作動したのは、愛染園の救済問題研究室が社会派官僚の先駆けと言える「内務省救済課の……法学士高田慎吾」を研究員に迎え入れるなど、内務省との関係を重視していた配慮であつたであろうが、その高田を採用するように求めたのは小河滋次郎であつた（『孫三郎伝』p.126.）。そもそも、小河が、先にも触れた通り、内務省の出身であり、監獄学の研究で当時の警保局長清浦奎吾の評価を受け大阪府知事・大久保利武、林市蔵に重用されるという経歴の、属官ではあつたが「先駆け社会派官僚」の先導者であつたのである。

大原社研の創立と協働会の設立は、共に1919年（大正8）となっている。その際、以上のような経過を経て、大原社研は協働会に10ヵ月、先行して創立することが出来たのであった。国家機関としての内務省の社会問題・労働問題への対応がようやく具体化する、その動きに先行して、行政指導を受け入れながらではあったが、民間レベルにおける社会問題・労働問題への対応が開始されていたのである。大阪の南におけるセツルメント活動は、社会のレベルにおける社会問題・労働問題への対応姿勢を崩すことをしなかった。社会化（socialization）の動向が、大原社研創立の主動因となっている経過が、ここで明らかとなっている。

米騒動は、『五十年史』によれば、大原孫三郎の社会問題研究所設立の必要性についての認識を「ますます強めた」ところの内在的契機として位置付けられている（p.5.）『高野岩三郎伝』においても同じで、孫三郎は、米騒動の「意味」を「天才的に直感力」をもって深く的確に捉えた一人であり、米騒動は孫三郎が大原社研の創立に進む「契機」となったと理解されている（p.213.p.217.）。そして、『孫三郎伝』が記述するように、米騒動は、藩閥政権から政党内閣への移行をもたらした政治的好機として、孫三郎によって巧みに利用された外在的契機ともなっているのであった。

孫三郎は、かなり高度な政治的判断力を持つ人であったのである。たとえば、大原社研創立後、大原孫三郎と床次竹二郎内務大臣との関係は近いものとなり、伯備線起点問題で、孫三郎と柿原政一郎の政友会寄りの姿勢は明白で濃厚なものとなっている。

6 さらなる検討課題

〔その1〕

大原社研創立80周年の機会に創立前史について試みられる概観的把握の作業は、個人的作業に終わることなく、大原社研の関係者によって広く検討を加えられるべき性格の作業であろうと考え、私は、以上のような内容の概観と論点整理について、1999年5月26日、大原社研の月例研究会で報告を行なった。

この月例研究会の席上、まず、愛染園関係の基本記録文書が、大原社研において、図書目録に掲載は無いが、コピー資料として保管されていることを知り、報告後にそれを見ることが出来た。そのおかげで、重要な事実経過の一、二、について、確実なデータで確認することが出来た。また、この月例研究会の討議を通じて、伶人町時代の大原社研の事業にセツルメント的活動が色濃く残っていた経過を改めて確認することが出来た。発足当初の大原社研が組織した読書会や労働学校がそれである。さらにまた、同志社大学人文科学研究所の共同研究によって石井十次「日記」のデータ・ベース化がなされ、それに基づく研究成果として『石井十次の研究』が発表されているとの指摘を受け、早速、関連論文を参照することが出来た。今回の研究ノート発表に当たっては、これらの指摘を追加し活かすように努めたつもりである。

ところで、この月例研究会における議論の中で、私は、一つの難しい質問に出会った。それは、当時「貧民窟」とされていた愛染園のセツル活動の対象地域と被差別部落との関係はどうなっていたのかという質問であった。質問者は賀川豊彦の研究者であり、賀川における被差別部落対象のセツル活動との関連における質問であった。私は、その質問に答えられなかった。

実は、その点については、私も同じような疑問を抱いていたのである。今回、大原社研創立前史

の概観作業に取り組んでいて、そのある段階で、私はふと気付いたのであるが、石井十次や大原孫三郎が展開した慈善事業なり救済事業なりの活動内容に、なぜか、被差別部落の住民や地域を対象にしたという形跡が見当たらないのである。岡山孤児院の院児の中に、あるいは、大阪における愛染園の隣保活動の対象者の中に、「部落差別」の被害者の存在を特定することは出来なかった。水平社宣言が発せられたのは1922（大正11）年であった。それ以前の日本の社会状況においては、慈善事業においても、救済事業においても、「貧民」を「細民」と捉え直す知的営為が発揮される場面はあったが、私が見た限りにおいて、その「細民」に、当時の言う「新平民」を含めて捉える問題意識は見当たらなかったのである。賀川豊彦の場合は、異例であったのであろう。

月例研究会で、いわゆる「スラム」と被差別部落の関係を問われた私は、その直後に、黒川みどり著『異化と同化の間 被差別部落認識の軌跡』（青木書店、1999年）を検討する機会を得た。そこで、「異化と同化」の交錯過程を通じて、「部落差別」の問題性が人々によって認識される経過を見ることが出来た。石井十次や大原孫三郎によって大阪の南部地区でセツル活動が開始された頃は、ようやく「同化」の段階に到達し、国レベルと社会レベルにおいて「細民部落改善」が課題として自覚されていたのである。留岡幸助「細民部落改善の概要」（『警察協会雑誌』1912年6月）とか、内務省地方局「細民部落改善参考資料」（1914年編輯）などが、その自覚の例である（黒川、同書、p.334.）。ただし、「同化」の内容となった「細民部落」を「改善」する課題の自覚とは、慈善事業と救済事業の対象を「細民」に限定し、その対象から「細民部落」を排除する論理の確立にほかならなかった。

1887（明治20）年、石井十次によって岡山孤児院の事業が開始された。1906（明治39）年、大阪へ岡山孤児院の事業が拡張された。1917（大正6）年、大原孫三郎によって大阪の南地区に石井十次の事業を継承する愛染園が設立された。これらの事業は、日本の社会の最底辺部分における社会活動であったと評価されて来たが、慈善事業と救済事業が排除するさらなる底辺に位置付けられる問題領域があったのである。そして、おそらくは、そのような日本社会の底辺の重層構造の実態把握が、慈善事業と救済事業を超えた社会問題研究の課題として、米騒動を経過した1919（大正8）年に創立され、創立後、間もなく水平社宣言に遭遇する大原社研によって把握されることになるのであった。

〔その2〕

なお、以上の私の報告について、月例研究会の席で何点かの教示を受けた外に、大原社研名誉研究員である二村一夫氏からも、報告文としてのこの研究ノートの内容を基にする何点かの指摘を受けることが出来た。二村氏から提起された諸点については、とりあえず、この段階における私の理解をメモとして記すに留めさせていただく。

- (1) 大原社研を分立させた後も石井記念愛染園が存続され今日に至っているのは、愛染橋の保育所、特に夜学校を支えていた富田象吉夫妻の熱意が大原孫三郎を動かしたからであった。…確かに、大原社研の社会問題研究は、救済事業に献身する富田夫妻の有り様を後に残す形の新領域設定となっている。
- (2) 早世した高田慎吾は、内務省の嘱託として捉えられるより児童問題の開拓者的研究者として位置付けられる方が妥当な青年であった。石井記念愛染園にあって、高田慎吾を中心とする救

済事業研究所が大原社研と併存した期間があった。……確かに、高田慎吾と小河滋次郎の問題意識に支えられる救済事業研究所の救済課題が大原社研の創立過程に含まれている。高田と小河は大原社研創立時の構成メンバーであった。

- (3) 富田象吉や高田慎吾らの社会事業への献身者たちを結集する場が大阪府社会課に設置された救済事業研究会であった。救済事業研究会発行の『救済研究』（監修・小河滋次郎）がある。大原社研創立史の検討に当たっては、同誌の分析が欠かせないであろう。……確かに、1913（大正2）年に刊行された『救済研究』（後に『厚生事業研究所』）があり、同誌に毎号のように論文を發表しているのは小河滋次郎である。1920年代初頭の同誌を見ると、高田慎吾が「大原社会問題研究所幹事」として「英国の児童保護制度に就て」なる一論を發表している。
- (4) 大阪府の社会事業に照応する位置にあったのは1910年代以降、大阪市において助役・関一を中心に展開された意欲的な都市政策の展開であった。……大原社研における社会問題研究の視野に大阪市における自治行政の展開が巨大社会（great society）状況への対応例として収まっていたであろうとする理解は、確かに魅力的な論点である。

（たかはし・ひこひろ 法政大学社会学部教授）

【資料・文献一覧】

(A) 社会福祉法人石井記念愛染園所蔵の記録類。(大原社研保管コピーによる)

『理事会決議録』愛染園

『日誌』明治四十年，岡山孤児院大阪分院

『日誌』明治四十二年，岡山孤児院大阪事務所

『日誌』明治四十年～四十四年，愛染橋保育所

『日誌』明治四十五年，愛染橋保育所・夜学校

『日誌』大正四年～大正六年，岡山孤児院大阪分院，石井記念愛染園

『日誌』財団法人石井記念愛染園

(B) 石井十次，大原孫三郎，大原総一郎ら関連者に関する主な文献。

安部磯雄『社会主義者となるまで』改造社，1932年。

石井記念協会『石井十次伝』記念協会，1934年。復刻，大空社，伝記叢書17，1987年。

西内天行『石井十次評伝・信天記』警醒社，1918年。

西内天行『石井十次の生涯と精神』教文館，1944年。

柿原政一郎『石井十次』日向文庫，1953年。

鷹津繁義編『石井記念愛染園三十五年小史』同愛染園発行，1953年。

柴田善守『石井十次の生涯と思想』1964年（春秋社，1978年）。

小河博士遺文刊行会編『小河滋次郎著作選集』（上・中巻）日本評論社，1942-1943年。

『小河滋次郎集』（社会福祉古典叢書2）解説；土井洋一，遠藤興一，鳳書院，1980年。

巻末の「小河滋次郎年譜」が詳しい。なお，同「社会福祉古典叢書6」は高田慎吾の論稿が収められる巻となっている。

柴田善守『小河滋次郎の社会事業思想』大阪日本生命済生会刊，1964年。

荒川如矢郎『柿原政一郎』同顕彰会（日向高鍋町）刊，1977年。

『大原総一郎随筆全集（1）-（4）』福武書店，1981年。

『大原孫三郎伝』同刊行会編，1983年。

室田保夫・田中真人・編著『石井十次の研究』角川書店，1999年。

同書所収、永岡正己「石井十次と大阪事業の展開」には、「石井記念愛染園資料」の説明があって参考になる。なお、同論文によれば愛染園に関して、先に挙げた『三十五年小史』の他に、次の二点の文献があるとされている。『愛染園六十年の歩み』石井記念愛染園発行，1970年。柴田善守『石井記念愛染園八十年史』石井記念愛染園発行，1992年。

以上の他に、参考文献として、井上太郎『へこたれない理想主義者 大原総一郎』講談社，1993年。同書改題『大原総一郎 へこたれない理想主義者』中公文庫，1998年。城山三郎『わしの眼は十年先が見える 大原孫三郎の生涯』飛鳥新社，1994年。新潮文庫，1997年，…など。

（C）大原社研創立前史関連の研究・報告，等。

法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所三十年史』同研究所刊，1954年。

大島清著，大内兵衛・森戸辰男・久留間鮫造監修『高野岩三郎伝』岩波書店，1968年。

法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所五十年史』同研究所刊，1970年。

中村 哲「幕末の倉敷知識人たち 大原社会問題研究所の「夜明け」」『資料室報』大原社会問題研究所発行，1971年6月，No.173。

中村 哲「大原社研の夜明け前 幕末の倉敷知識人たち」『法政』1971年11月，第20巻第11号。『資料室報』発表論文に「多少の削除，訂正」。加筆部分もあり。

中村 哲「近代日本の保守精神 阪谷芳直『三代の系譜』私見」『本と批評』（エディタースクール）1980年9月。坂谷朗蘆の関係で森田節斎など，岡山・倉敷の知識人の人脈が語られている。

二村一夫「大原孫三郎と河上肇」『大原社会問題研究所雑誌』No.360.1988年11月。

二村一夫「大原社会問題研究所を創った人びと」『大原社会問題研究所雑誌』No.426.1994年5月。

和田 強「大原孫三郎・高野岩三郎・河上肇 大原社会問題研究所をめぐる思想に関する小論」『経済と経済学』（東京都立大学）No.82.1997年2月。

和田 強「河上肇と高野岩三郎 大原社会問題研究所をめぐる」東京河上会 / 1997年6月22日における報告。（2．大原孫三郎と大原社会問題研究所の設立 大原と石井十次 石井の救済事業の批判的継承）

高橋彦博・飯田泰三「石井十次聖園にある浦上玉堂顕彰碑」『法政』1998年10月。

高橋彦博「大原社研と大原美術館」（未発表）